Japan College of Social Work
日本社会事業大学

Social Workers

社大OB・OGがつむぐ福祉の絆　ソーシャルワーカーズ

公益財団法人　鉄道弘済会　総合福祉センター　弘済学園のみなさん

2015
10月
Vol.13

障がいのある人と同じ目線に立ち、一人ひとりが幸せな人生を歩めるように

自閉症や知的障がいなど発達障がいを抱えている人が安定した生活を送れるよう、
その人に合わせた療育支援をする施設で働くソーシャルワーカーを紹介します。

interview

岩崎 俊雄さん（いわさき としお）

社会福祉法人 すぎのこ会
理事長

interview

片山 夏希さん（かたやま なつき）

公益財団法人 鉄道弘済会
総合福祉センター 弘済学園
生活支援員

毎日の生活が安定して送れるよう環境を整え、わかりやすい言葉と平常心で接する

社会福祉学部 福祉援助学科
2013年3月卒業

かたやま なつき
片山 夏希さん 社会福祉士

公益財団法人　鉄道弘済会 総合福祉センター
弘済学園 生活支援員

PROFILE

1990年　香川県出身
2013年　社会福祉学部福祉援助学科卒業
2013年　社会福祉法人鉄道弘済会　総合福祉センター
　　弘済学園入職　現在に至る

最初はぶつかり合い、少しずつ心が通じ合えるように

「子どもたちが穏やかな表情になり、心が通じ合えたと思えるときはうれしいですよ」

そう笑顔で話す片山夏希さんが勤めているのは、神奈川県秦野市にある知的障がいと自閉症児者を支援する公益財団法人鉄道弘済会総合福祉センター「弘済学園」です。およそ100人の入所者のうち片山さんは10歳～24歳の女子8人の生活全般の支援をしています。

「中には非常にこだわりの強い強度行動障がいのある子もいます。子どもたちは繊細な感覚を持っているので、少しでもいつもと違うことが起きたりすると情緒不安定になってしまいます。集団で安定した生活を送るためには、毎日の行動を同じ順序で行うことが大切なんです」

そのため園内はすべてシンプルでわかりやすい言葉や絵などで伝える配慮がされています。

毎日決まった動線で、常に平常心で接することが基本

片山さんは入職して3年目。入職当初から現在の子どもたちを担当しています。最初は先輩職員に付いて、次第に片山さん一人に任されるようになりましたが、子どもたちとうまく意思の疎通が図れないこともありました。

「私自身もまだ慣れていないころには、子どもたちの方も新しい担当者に興味も警戒心も持っていますから、この先生はどんな反応をするのかな?と試しに大声をあげてみる子もいました」

そのときはつい注意する口調になってしまったため、子どもが興奮してしまい、先輩にヘルプを頼んだそうです。

「私たち職員が常に平常心で同じ態度で接することが基本ですが、どんなふうに伝えれば相手にわかりやすいのか、今も模索する毎日です。これからも常に支援内容を見直せる自分でありたいと思っています」

子どもたちにキラリと育ちを感じるときがやりがい

片山さんが障がい児の支援に進もうと思ったのは、小学校の同級生に障がい児童がいたことや、中学校のとき障がい者通所施設で職場体験したことが心に残っていたからでした。

日本社会事業大学ではどの授業もすべてとても学び甲斐があったと言います。「障害者福祉論」や「社会福祉援助技術論」では担当教官がスクールソーシャルワーカーとして現場に立った体験事例などを元に解説され、実際の対処のしかたなど実践的なアプローチを学べたことが印象深いと片山さんは振り返ります。

そして3年目を迎えた片山さんはこの4月から後輩を指導する立場になり、ある昼食後のひとときに、ふと、子どもたちと心が通じ合えたと感じることがあったと明かしてくれました。障がいが周囲から理解されず、さらに二次障がいを引き起こして入所した子が、ぶつかり合いながらも規則正しい生活を送るうちに少しずつ落ち着き、信頼関係が築かれていったのだなあ、と実感したそうです。

「こんなふうに、日々の仕事の中で、子どもたちにキラリと育ちを感じるときがやりがいなのかもしれません。それに、一生懸命になれる仕事っていいと思うんですよ」と話す片山さんの表情からは自信と充実感がうかがえました。

片山さんのある日

（日によって業務内容は変わります）

6:30	出勤。夜勤担当者から引き継ぎ。担当している8人の子どもたちを起こす
7:00	トイレ、着替え、洗面など。洗面所では「お顔を洗います」と声をかけ順番に洗顔
8:00	食堂に移動して朝食。移動するときは全員で手をつなぐ。配膳する間は「手はおひざに置きましょう」と声かけ。食事の際は見守り、介助など必要に応じてサポート
9:00	食後の歯磨き、身支度し、同じ棟内での日課（授業）に送り出す
9:20	午前の日課開始。子どもたちが日課を受けている間に記録をつけたり居室の掃除など
10:00	1時間休憩
11:00	昼食の準備。日課を終えた子どもたちが帰寮するのを迎える
12:00	食事の介助。食後は子どもたちと一緒にビデオを見たりしてくつろぐ
13:30	午後の日課に送り出す。洗濯担当から届けられた洗濯物をたたんで各ロッカーにしまう
14:45	遅勤の勤務担当者に引き継ぎ、勤務終了。寮に戻る

社会福祉学部 社会事業学科
1970年3月卒業

利用者の視点に立っているかと、常に自分に問いかけてきた

岩崎 俊雄さん

社会福祉法人 すぎのこ会 理事長

PROFILE

1947年　福島県出身
1970年　社会福祉学部社会事業学科卒業
東京都民生局、知的障がい児通園施設を経て
1991年より現職

利用者の皆さんと

ひのきの杜

「人間らしく生きたい」という魂の叫びに圧倒されて

現在はすぎのこ会の理事長を務める岩崎俊雄さんですが、本格的に福祉を目指そうと決意が固まったのは日本社会事業大学に入学してからだと言います。

「入学してからの先輩方との出会いが原動力になってこれまで私を導いてくれたのです」

岩崎さんが入学した1966年は高度経済成長期で日本全体が活気にあふれた時代で、学内でも福祉への熱い思いを抱く学生が議論を戦わせていました。「この学校で何を学び、何をしたいのか。先輩たちの熱い問いかけと議論に必死についていきました」

中でも、「身体障がい者問題研究会」に入った岩崎さんは脳性麻痺による身体障がいを抱えた3人の先輩方に大きく影響を受けました。

身体障がい者に対して当時主流だったのは、障がい者は施設の中で支援を受けながら生活するというものでした。しかし、当事者であるその先輩たちの主張は違っていました。

「俺たちは施設で保護されて生活するのではなく、働いて自立して、人間らしく生きたい。身体に障がいがあっても、俺たちは決して〝かわいそうな人たち〟ではないのだ」

この強烈な魂の叫びともいうべき声に圧倒されて、入学間もない岩崎さんは衝撃を受けました。大学の授業に加えて、先輩たちの生の声に応えようと、奮い立ちます。

「大学でのこの経験から、私は常に、利用者の方の視点に立っているのかと、自分自身に問いかけ続けてきた日々でした」

もっと実践的に障がい者支援をしたいと、妻の故郷で起業

卒業後は、行政に携わろうと東京都の職員として民生局に入職します。それは身体障がい者が自立するためには、まず国や行政が支援政策として身体障がい者の雇用を制度化することが必要ではないかと岩崎さんは考えたからでした。しかし配属先では事務的な仕事が中心で、もっと実践的な仕事に携わりたいと焦る気持ちのまま2年が過ぎたころ、知り合いから栃木市で知的障がい児の通園施設を立ち上げるので手伝ってもらえないかと打診を受けます。

それは岩崎さんにとって大きな分岐点でした。妻の操さんは大学の同級生で、卒業時に結婚して東京でケースワーカーとして働いていました。操さんは栃木市出身で農家の後継ぎでもあったので、これをきっかけに二人で栃木を拠点にする決意を固めたのでした。

小さなすぎのこが、やがて大木となる願いを込めて開設

こうして岩崎さん夫妻は東京から栃木の操さんの故郷に転居し、岩崎さんは身体障がい児童の通園施設の立ち上げに関わり

○岩崎さんのあゆみ

1970年	社会福祉学部社会事業学科卒業　結婚 東京都民生局児童部勤務
1973年	都の職員を退職し栃木市に転居　知的障がい児通園施設勤務
1975年	社会福祉法人「すぎのこ会」設立
1976年	栃木市岩舟町に知的障がい者更生施設「すぎのこ学園」開設　事務長就任
1983年	知的障がい児更生施設「あすなろ園」開設
1991年	「すぎのこ会」理事長就任
1998年	重症心身障がい児（者）通園センター「はまなす」開設
1999年	知的障がい者更生施設「もくせいの里」開設
2000年	知的障がい者授産施設・障がい児者デイサービスセンター「けやきの家」開設
2003年	身体障がい者療護施設「ひのきの杜」開設
2011年	高齢者・障がい者複合福祉施設「やまと」開設
2012年	就労継続支援事業所「けやきの家」「みずほの家」開設
2015年	「すぎのこ会」40周年を迎え記念式典、記念誌発行

40周年記念誌（左）と妻の岩崎操さんの著書（右）

そこで働くようになりました。ここの保護者の方との出会いが、後々の「すぎのこ会」誕生につながることになります。

この通園施設は保護者の長年の尽力で開園されたものでしたが、子どもの年齢が上がるにつれて切実な声が聞かれるようになっていました。「この子たちは18歳になったら居場所がなくなってしまう。将来が心配です。入所施設を作れないでしょうか」という保護者の訴えでした。

この通園施設のPTA会長は岩崎さんに全面の信頼を置いてくれて、新しく障がい者の入所施設を建設することを後押ししてくれました。一方、岩崎さんは学生時代の先輩方から学んだように、利用者の視点に立って何が必要なのかを常に考えてきました。

「私は保護者の方が子どもの将来を思う気持ちも痛いほど理解できました」

そこで毎週のように県庁をたずね行政側と何度も話し合いを重ねているうち、岩崎さんの背後に並ぶたくさんの保護者の思いが伝わったのか、認可が下り、1976年に知的障がい者更生施設「すぎのこ学園」開設にこぎつけることができました。

「学園を始めたとき私たち夫婦はまだ20代でした。小さなすぎのこがやがては大きな杉の木に成長するよう願いを込めて命名したのです」

岩崎さんは感慨深げに振り返ります。以来40年、利用者のニーズに合わせて制度や施設を作っていこうという姿勢を貫いてきました。

たくさんの出会いに支えられてきた恩返し

その後はまさに馬車馬のごとく突っ走ってきたという岩崎さんです。

すぎのこ学園に続いて、入所施設だけでなく全国初の通所施設も開設。更生訓練だけではなく生活のための施設も作りました。組み立て部品などの作業や野菜の栽培など、今では当たり前のことでも、当時は障がい者施設で生産活動をして収入を得ることは画期的な試みでした。

「地域の皆さんとも挨拶を交わして、廃品回収などを通して交流することで、障がい者施設に対する偏見も徐々に払しょくされていきました」

さらに「小さな施設を地域の中に」をモットーに、グループホームやケアホームなど、あらゆるニーズに応えた施設も充実していきました。

そんな2011年のある日、岩崎さんは大病を患い、自分自身の身体についても深く考えるようになりました。

「私自身、いつ障がい者となるかもしれない。明日は我が身と考えると、これからは障がい者だ、高齢者だと分け隔てするのではなく、誰もが安心して暮らせるシステムが必要ではないかと思い至りました」

そこで、岩崎さんは障がい者はもちろん児童や高齢者、生活困窮者などが、住み慣れた地域で誰もが安心して暮らせる場所をつくろうと、生涯を通じた支援をする「トータルサポートシステム」を5年計画で進めているところです。

今では、すぎのこ会は栃木市と日光市に障がい者支援施設やグループホームなど12拠点40事業を手掛けるまでになり、岩崎さんはすべてを統括する多忙な日々ですが、職員とはメールで意見交換するなど常に気配りも忘れません。

最後に、岩崎さんご夫妻は穏やかな笑顔でこう語ってくれました。

「私たちは今まで、誰かに奉仕しているという気持ちでやってきたわけではありません。障がい者の保護者の方やいろいろな出会いの中で、たくさんの方の力を借りて支えられてきたのは私たちです。それをこれからもお返ししていきたいと思っています」

▲岩崎さんご夫妻は、ともに日本社会事業大学の卒業生

障がい児施設とは？ 安定した生活が送れるよう、その人に合わせた支援を行います

今回ご紹介した片山さんや岩崎さんが働いている知的障がい・自閉症など発達障がい児の療育支援施設について紹介します。

Q1▶ 知的障がい・自閉症など発達障がい児の療育支援施設とは何をするところですか？

A1▶ 原則として18歳までの知的障がい・自閉症など発達障がいのある児童を対象に、一人一人が情緒的に安定できる環境を作り、生きていくための力を培うことを目的にした施設です。食事や着替え、排せつなど日常の生活支援や、発達段階に合わせた作業など日中活動支援を行います。

Q2▶ 障がい児施設ではどのようなソーシャルワークをするのですか？

A2▶ 幼児期から児童期、青年期において、療育を通して成人期の自立に向けた支援を行います。
具体的には24時間体制で交代制勤務に就き、少人数グループを担当して一人ひとりの時期と発達に適したプログラムを準備し、必要に応じて医療との連携を取ります。ソーシャルワークの専門性が生かされる仕事です。

Q3▶ 全国の障がい児数と施設に入所している児童数は？

A3▶ 全国に障がい者支援施設は約6千カ所あります。全国の18歳未満の知的障がい児は約16万人、そのうち施設に入所しているのは7千人（平成25年10月1日現在／厚生労働省「社会福祉施設等調査」施設の状況より）、身体障がい児は約7万8千人で5千人が入所しています（平成27年度版内閣府白書基本統計より）。

Q4▶ 施設内では、子どもたちはどのような生活を送っているのですか？

A4▶ 子どもたちは、男女別、障がいの状態などによって小グループに分かれて生活し、担当職員が24時間体制で支援しています。義務教育年齢にある児童生徒は施設訪問教育制度の適用を受けます。弘済学園では日課と呼ぶ作業で機織りや鎌倉彫もしています。

機織り作業は日課の一つ

発行：日本社会事業大学　〒204-8555 東京都清瀬市竹丘 3-1-30
電話：042-496-3080（入試広報課） URL：http://www.jcsw.ac.jp